

ネット犯罪から子どもたちを守るために

マイクロソフト株式会社 セキュリティ戦略責任者 古川勝也

親子向けのイベントで啓発活動を

—— マイクロソフト株式会社では、インターネットの安全に関して、セキュリティ教育や啓発活動を行っているそうですね。

古川 弊社のお客様には巨大企業から一般のユーザーの方まで、いろいろな方がいらして、さまざまなソフトウェア製品を提供しています。ソフトウェアのセキュリティ技術は日々向上していますが、そのような技術で100%安全が守れるとまでは言えません。ネット上の犯罪技術も日々向上していますし、たとえ100%破れない鍵があったとしても、鍵をかけ忘れることもあるわけですから、お客様にもきちんとセキュリティの意識をもっといただく必要があると思います。セキュリティ問題というのは、インターネットが使われるお客様すべてにかかわりますから、もちろん子どもも例外ではないと思います。

学校教育にパソコンが積極的に取り入れられていますし、家庭でもインターネットが使える環境が整っています。また、携帯電話でインターネットが利用できるようになったことから、子どもも小中学生の頃から9割近くがインターネットに親しんでいます。

とくにここ5年間のブロードバンドの普及によって、情報量は飛躍的に膨らみました。比喩的に言えば、現代の子どもたちは車がビュンビュン行き交う高速道路の真ん中にポツンと立たされているような状態です。インターネットによる恩恵も享受するでしょうけれど、身を守る術も身につけないと不利益を被ることになると思います。

—— 子どもへの指導というのは具体的にどんなことをされているのですか。

古川 学校からの依頼でインターネット安全教室を中学校や高等学校で開催することもあります。自主的には親子向けのイベントを開催しています。今年は「インターネット安全フェア2006」を池袋のサンシャインシティで開催しました。

イベントは2部構成になっていて、前半はインターネットを利用する上での注意点をクイズ形式で解説する「セキュリティ・クイズ」。後半はテレビ番組「仮面ライダーカブト」と「ふたりはプリキュア」のキャラクター・ショー。ショーを目当てにいらした親子連れに情報セキュリティの重要性を伝えることを目的としています。

セキュリティ・クイズの問題は、①友達にパスワードを教えてほしいといわれたらどうするか、②「おもしろいゲームで遊べる」といったメールが知らない人から送られてきたらどうするか、③友達から写真付きメールが送られてきたらどうするか、④メル友から「会いたい」と誘われたらどうするか、⑤アンケートに答えるとプレゼントがもら

える Web ページを見つけたらどうするかなど、ネットを介したコミュニケーションに関する内容が主です。

ネット犯罪から子どもを守るのは保護者だけ

—— 親子向けのイベントに力を入れるのには理由があるのですか。

古川 いまの中学生や高校生は、ネットに関してはかなりの知識を持っています。彼らは安全管理に関することよりも、もっと技術的なテクニックについて知りたがっています。弊社の人間が行くとなると、手ぐすね引いて、マニアックな質問を用意して待っていたりします(笑)。それでは本来の安全教育の趣旨からはずれてしまいます。素直に大人の忠告に耳を傾ける年齢として、小学校の高学年ぐらいを対象にした方がいいと思っています。

また、ネットは完全にプライベートな世界ですから、そこに介入できるのは保護者だけです。子どもの安全は学校・地域・家庭が三位一体で守るのが基本ですが、ネットの場合はそれができません。ネットは学校も地域も越えて、外に開かれてしまっているわけです。子どもがネット上で何をやっているのかをチェックできるのは保護者だけです。だから、私たちは親子向けのイベントにこだわっているのです。啓発の対象は子どもだけではなく、保護者も含めてなのです。会場での体験をきっかけにして、親子でインターネットの安全な使い方についてきちんと話し合ってもらいたいと思っています。

知識を行動にステップアップする

—— 指導上でポイントになるのはどういうことですか。

古川 知識を与えるだけで終わらないということでしょうね。現代人はインターネットの知識だけならかなりのものをもっています。子どもたちもクイズの設問にはほとんど正解します。しかし、それが行動につながるかというと、そうとは限りません。

たとえば、交通事故による負傷者は年間100万人以上にのぼります。粗暴な運転がいかに危険なのか、私たちは知っています。しかし、自分だけは大丈夫だろうと思い、知らず知らずのうちにスピード違反をしたり、飲酒運転していたりするのは。知識が行動に生かされない。悲惨な事故は他人事と思っているからです。

同じようにネットに関して、どれだけ危険な例を紹介しても、それだけでは真の啓発にはならないと思います。たとえば、子どもさんに、「『メールアドレス教えて』と言われたら、どうする」と尋ねます。続けて、保護者の方には、「『教えていい?』と子どもさんから尋ねられたらあなたは どうしますか?」と聞きます。そのようなリアルな設

定で答えを求めると、初めてハッとして、「どうしようか」「何て言おうか」と考え始めるようになるのです。現実こんな怖いことがあるんですよと事例で示して、対応についても実践してもらおう。そのような参加型の形式にしてケーススタディをしてもらわないと、経験として記憶には残りませんし、応用も利きません。

——子どもが巻き込まれる犯罪にはどんなものがあるのですか。

古川 統計的に把握しているわけではないですが、ネット上で知り合った大人とのトラブルが多いと思います。いま出会い系サイト被害者の80%以上は児童だという警察の発表もあります。最近恐ろしいと思うのは、大人が同世代の子どものような書き込みをして、ごくふつうの真面目な子どもを陥れるケースです。子どものふりをしてフォーラムなどで友達になって、その子と会う約束をする。待ち合わせの場所に行ってみたら、大人が待っている。「本人は家にいるから」と言うのでついて行ったら、実は幼児性愛者だったというようなことが起きています。「セキュリティ・クイズ」に④メル友から「会いたい」といわれたらどうするのか、という設問を入れたのもそのためです。

そういう時に親が説明抜きで「会ってはダメ!」というだけでは、かえって危険なことになる場合があります。子どもが黙って会いに行ってしまう、被害に遭うことがあるからです。保護者はなぜ危険なのかをちゃんと説明して、それでもどうしても会いたいといったら、保護者同伴で人目が多い場所で会うことを約束させることです。

リアルな世界に子どもの居場所を

古川 インターネットは調べ学習には万能な辞書のように便利に使え、また遠隔地や海外の友達とコミュニケーションするなど、子どもたちの学習面だけでなく情緒の発達においても有益なものをもたらします。しかし、子どもにインターネットは便利だから使おうというだけではなく、バーチャルな世界はリアルな世界につながっていて、そこにはさまざまな危険が潜んでいることも、きちんと話しておく必要があると思います。

ネット上の犯罪はある程度技術で防ぐことはできますが、最終的には人の判断に頼るしかない。それを子どもができないなら、親がやってあげるしかない。子どもにも親にも共通していえるのは、知識だけではなくて、実際に対応できることです。

——保護者が日頃から気をつけるべきことというのはありますか。

古川 子どもの居場所をネット上だけにしないようにする

ことでしょね。家庭の中にちゃんと安心できる居場所があるようにしないと。子どもであろうと大人であろうと、ネット上だけで生きている人は危険な目に遭う率が高くなります。精神がアンバランスで正確な判断を誤る場合が多くなりますからね。

犯罪者は手を変え、品を変え、いろいろやってきますから、啓発活動はこれからも継続していきたいと思っています。保護者の方は概して受身の方が多いですが、できるだけ一緒に取り組んでもらえるような仕掛けを考えていきたいと思っています。

(取材：事務局 木下真)



「インターネット安全フェア2006」池袋サンシャインシティ会場